

# 読書のすすめ

立志館セミナーから、この冬おすすめの本を紹介いたします。おもしろそうに思える作品があれば、ぜひ読んでみてください。

## 外套・鼻

向井先生  
ニコライ・ゴゴリ著・平井 肇 訳 岩波文庫

お話の舞台は十七世紀ロシア。理髪屋のイワン・ヤーコヴイチは、ある朝、食っていたパンの中から、「鼻」が出てきてびっくりします。殺人犯にされては叶わないと、慌てて近所の川に捨てるのですが、実はこれ、殺人事件ではなく、ある人の顔から鼻が逃げ出してしまったという、なんとも素敵なお話。

鼻の持ち主はえらいお役人のコワーリヨフ。彼は必死で鼻を探しまわります。一方、逃げ出した「鼻」のほうは、高級な服に身をつつみ、教会で祈りを捧げるなど、自由を謳歌しています。えっ、鼻が、服を着る？ 祈る？ なんだかよくわからない展開ですが、さらに、こんな表現もあります。「鼻は、大きな立襟の中へ顔をすっかり隠して、祈りを捧げていた。えっ……。想像のはるか斜め上に行く奇妙奇天烈な物語、コワーリヨフと鼻の運命やいかに！」

## スターガール

中沖先生  
ジェリー・スピネリ著・千葉茂樹 訳 角川文庫

主人公は、マイカ・ハイスクールに通う普通の男子、レオ。二年生の新学期が始まった日、自らを「スターガール」と名乗る風変わりな女の子が転校してきます。奇抜なファッションに身を包み、雨の中で踊り、ウクレレをかき鳴らして学校の誰かの誕生日を祝う彼女は、たちまち学校中の噂になりました。型にはまらない彼女にレオも惹かれていきます。ところが他校とのバスケットボールの試合で、相手チームも応援してしまったスターガールは、全校生徒から無視されるように。「なんで、ぶつにできないのさっ？」彼女を責めるみんなに同調する気持ちと、彼女を愛する気持ちで揺れ動くレオは……。

「普通」「個性」ってなんださう、と考えさせられる青春小説。読めばきっと天眞爛漫なスターガールの虜になるはず！ ぜひとも中学生の間に読んでほしい一冊です。

## 時をかけるゆとり

宮村先生  
朝井 リョウ(あさい りょう) 文春文庫

この本はエッセイであり、数々の面白エピソードが載っています。カットモデルをした時の話、ファーストフード店で黒タイツのおじさんに話しかけられた話など、引き付けられるものばかり。どれも日常の中のちょっとした話や出来事ですが、読んでいて思わずクスッと笑ってしまいます。

生きていると失敗をたくさんしますが、それも悪くないなと思えるような作品です。第二弾として『風と共にゆとりぬ』という本もあるので、気になる方はぜひ読んでみてください！

## 時給三〇〇円の死神

川端先生  
藤 まる(ふじ まる) 双葉文庫

高校生になったらコンビニやファミレスでアルバイトをして、あれを買いたい、これが欲しい……なんてイメージしている人多いのではないのでしょうか。

クラスメイトの花森にスカウトされて佐倉が始めることになった職業は死神。時給は三〇〇円。仕事内容は「この世に未練を残した死者の希望を叶えること」で、残業代なし、交通費なし、の今風に言うところ「超ブラックバイト」です。ただし、半年間勤め上げたら願いを一つ叶えてもらえる。

死者の未練は？ 佐倉は死神業を勤め上げられるのか？  
そしてどんな願いを叶えてもらうのか……。ちょっと切なく、ちょっと温かいお話で、是非手に取ってほしい一冊です。

## 最新脳科学でついに結論「本の読み方」で学力は決まる

山本先生  
川島 隆太(かわしま りゅうた) 監修 青春新書インテリシエンス

なかなか刺激的なタイトルです。ただ、みなさんのなかにはそりゃさうだろう、と思う人もいるかもしれませんね。

ですが、この本の面白ところは単に結論を出すのではなく、仮説を立ててから、どのようなデータを用い、そのデータをどのように読み解き、結論に達するのか、を実践している点にあります。毎日どれくらい読書をするか、学力が一番高いのか、どんな本を読めばどのようなメリットがあるのか、早く読むのとじっくり読むのはどっちがいいのか……。興味を持った人はぜひ本書を手にとってみてください。

## 青い光が見えたから 十六歳のフィンランド留学記

鳥居先生  
高橋 絵里香(たかはし えりか) 講談社

英語が好きで、将来留学することを考えている人もいるのではないのでしょうか。そんな人に是非読んでもらいたい作品を紹介いたします。

この本の著者は、トーベ・ヤンソン著の「ムーミン」をきっかけに、フィンランドに興味を持ち始めます。そして、高校から留学することを決意します。それからはフィンランドを紹介している本や雑誌を見つけては、片っ端から読んで、情報を集めていきます。自分でフィンランド語も勉強し、「ちょっと無理なんじゃないか」「大学からの留学にしたらどうか」という周りの心配もはねのけ、フィンランドの高校に通うことができるようになります。留学してからは、余裕のない生活を送りながらも、高校の友達と充実した毎日を送っていきます。

## マスクレード・ナイト

名倉先生  
東野 圭吾(ひがしの けいご) 集英社

思い返してみてください。家族の前での「自分」、友達の前での「自分」、先輩や先生の前での「自分」。その場に応じて「自分」を変えてはいませんか？ 同じように、人はみんな「仮面」をかぶりながら生活しています。それぞれの仮面の下に思いもよらない素顔が隠れているとしたら……。

ある日、若い女性が殺害されるという事件が発生します。その事件の捜査をしていた警視庁に「犯人はホテルのカウントダウンパーティに現れる」という密告状が届きました。刑事の新田浩介はホテルマンとして潜入し、女性ホテルコンシェルジュの山岸尚美らと協力しながら事件の手がかりを探していきます。次々と現れる「仮面」をかぶった怪しい宿泊客。仮面に隠された宿泊客の素顔とは？ 密告状の送り主は？ そして犯人は一体だれなのか？

殺人事件に関する推理小説としての面白さももちろんあるのですが、ホテル内で起こる色々なトラブルに対応する山岸尚美の活躍や人間ドラマも楽しめ、時には心が温かくなります。とにかく読めば必ず楽しめる一冊です。



加藤 英明(かとう ひであき)

エムピーシエー

著者が、世界を巡り、自分の目で野生の爬虫類を観察し、その生態に触れる体験が描かれた作品です。一・五mに迫るゾウガメ、寿命一〇〇年のトカゲ、黒いイグアナなど、同じ地球上に生きる不思議な生き物たちが紹介されています。

私たち人間は、子どもころは比較的どんな生き物にも興味を持ちます。それが、成長するにつれ、人間社会の中で人間、あるいは犬のような一部のペットだけと接するようになり、あまり接する機会が多くない爬虫類などの生き物に対して嫌悪感を抱くことがあります。しかし

これは、「関わったことがないあの人は嫌い」という感覚と同じです。触れ合えなければ、関係を持たなければわからない良さも存在するのです。世界には、皆さんの知らない生き物がたくさんいて、そういった生き物たちもすべてひっくり返して「世界」なのです。もし、まだ見ぬ世界に興味を持った人は、ぜひ色々な生き物について知ろうとしてみてくださいね。



## 北の海(上・下)

豊田先生

井上 靖(いのうえ やすし)

新潮文庫

旧制中学を卒業し、浪人生活を気ままに過ごす洪作は、勉強もせずに母校の柔道部に毎日通っていました。そんな中、偶然出会った旧制四高(現在の金沢大学)柔道部員の蓮実という男に、「練習量がすべてを決定する」寝技中心の高専柔道の存在を教えられます。そして、蓮実の言葉に魅了され、浪人生の身でありながら、合格もしていない学校の柔道部の夏稽古に参加する洪作は、勉強もせずただ毎日ぼろぼろになるまで柔道をする部員たちにもひかれています。

「ニッポンの部活道」「ニッポンの受験道」の神髄がこの作品の中にあります。何も考えていないように実は何かを考えているような洪作と、あえて何も考えずにいようと努める柔道部員たち。大正末期から昭和初期にも確かにあった「青春」が、著者らしい上品な文章で描かれる名作です。

椎名 誠(しいな まこと)

講談社

ぼくの家には三十八歳のおじさん、「へつちゃん」がいる。くうたらしているけど、ぼくはへつちゃんが好きだ。世界中を旅してきたへつちゃんの話は、信じられないような「ほら話」ばかりだけど、とにかくおもしろくて……。

光村図書二年生の教科書にも掲載されていますが、実はそれとは別に、へつちゃんの話を中心にした小説があるのです。馬を飲み込む水蛇スクリューの話、三本足、五本足の生き物の話。彗星のしっぽをつかまえる計画、などたくさんのおもしろ不思議話が「へつちゃん」の軽妙な語り口で綴られています。理科好きな人もけっこうツボにはまるかも。この本を通して、みなさんが「やわらか頭」になってもらえればと思います。

## 逢魔が時に会いましょう

高田先生

萩原 浩(おぎわら ひろ)

集英社文庫

夢をあきらめきれずに大学へ院生として残ることを決意した高橋真矢は、民俗学者布目准教授のフィールドワークの助手をするよう依頼されます。若手遠野では「座敷わらし」に驚かさず、富士山麓三ツ淵では「河童」に襲われ……。二人は謎を解明することができのでしょうか？

真矢と布目の珍道中の合間に、「歴史の勝者の自慢話みたいな由緒ある文献とは別のルートで、昔、この国で何が行われてきたのかを探る手立て」が語られます。それこそまさに「民俗学」。読みやすい文章を楽しみながら、少し知識欲を満たしてみたいかがでしよう。

## 旅屋おかえり

中津先生

原田 マハ(はらだ まは)

集英社文庫

売れないタレント「おかえり」こと丘えりか。自身の旅番組を打ち切られた彼女は、人の代わりに旅をする仕事「旅屋」を始めるも、泣き出しそうなトラブルばかり。でも旅を通して、依頼人の願いを超えた大きな愛や人との絆に気付いていきます。

「おかえり」と言ってもらえることは当たり前ではない幸せであること、日常の狭い人間関係を越えた先にも人の優しさや温かさが広がっていることに気付かされる作品です。

仁木 英之(にき ひでゆき)

中公文庫

織田信長は、弟の信勝らを滅ぼして尾張(愛知県)を統一後、今川義元を桶狭間で撃破、天下統一の端緒を開いた。そして、美濃(岐阜県)の斎藤を粉砕、妹の市を嫁がせ北近江(滋賀県北部)の浅井と同盟を締結後、足利義昭を將軍に就任させ、天下統一に弾みをつけた。しかし、義昭が信長の勢力伸張を望まず信長包囲網を構築して抵抗、羽柴(のちに豊臣)秀吉や明智光秀らを「軍団長」に任命してそれに対抗したが、光秀に本能寺で殺され、天下統一の夢は露と消えた。

本書の主人公は、「レガトゥス・レギオニス」(ギリシア語で軍団長)の一人、信勝に味方して信長と敵対したがのちに許されて重臣筆頭として活躍、本能寺の変の後に市と結婚して信長の後継者候補となるも秀吉に敗れて自害した、猛将「鬼柴田」こと柴田勝家。信長・秀吉・光秀の引立役として扱われてきた勝家の、信勝の後見人時代から桶狭間の戦い直後までの生き様が描かれた本書、続編が期待される。

## サピエンス全史(上) 文明の構造と人類の幸福

山田先生

ユヴァル・ノア・ハラリ 著・柴田裕之 訳 河出書房新社

学校や塾以外にも、勉強できる場所は身近にたくさんあります。そして、勉強はテストのためだけの辛く厳しいものではありません。ふと疑問に思ったことや好奇心を満たすために調べ、考えることは十分勉強と言ってもいいのではないのでしょうか。

我々「人間」とは一体何なのでしょう。我々ホモ・サピエンスの先祖はなぜ食物連鎖の頂点に立ち、文明を築くことができたのでしょうか。「まだ習っていない」ことを問うのは不公平だと感じるかもしれません。では、「公平」とは? 「公平」をはじめ、宗教や伝統、国家や人権、法律や貨幣といったものは全て人間が作り出した「虚構」であると筆者は述べています。

この「虚構」を手にしたことによって、ホモ・サピエンスは生存競争に打ち勝ち、万物の霊長たる存在になれたとのことなのです。それが真実かどうかは誰にも分かりません。一つの説です。ただ、知的好奇心を育て上げるきっかけになれば、この本を読む価値は十分にあるのではないかと思います。